トヲ期ス

顧ルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ、戰後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ爲シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マザルヘシ抑々我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚籍シテ維新ノ宏猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ、爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

明治四十一年十月十三日

御名御璽

而して明治天皇は明治四十三年八月韓國を併合せられ、明治四十五年七月三十日六十一歲を一期として神去りたまひ今上陛下は大正元年七月三十日踐祚あらせられた、此時掌典長をして賢所に祭典を行はしめ且つ踐祚の旨を皇靈殿に奉告せしめたまひ、同時に劒璽渡御の儀を行はせられ、翌三十一日踐祚後朝見の儀ありて群臣を召し勅語を下し玉うて曰く

『朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス祖宗ノ宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レカ行使ヲ愆ルコト無ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セサランコトヲ期ス有司須ラク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ朕ニ事ヘ臣民亦和衷協同シテ忠誠ヲ致スヘシ』

以上の御詔勅を拜讀して、近代禪者の主張する、三皈三聚淨戒も十重禁戒も發

願利生も行持報恩も六度萬行も因緣因果の理も八正道も四諦の法も十二因緣の說も無常觀も懺悔罪滅の意味も全部兩陛下の御詔勅の中に含有して居ることが分明であります。卽ち陛下の尊慮が禪者の主張と歸を一にすることが明了である。只だ其式に聊か異なる點があるのみ、而して先帝陛下が四十六年の御治世中各宗の高僧に對し勅額を賜はりまたは八人の大師號を御宣下あらせられたについて、佛敎を御尊崇になりましたことが明かである。上來は明治天皇陛下躬を以て御實行あらせられた御事蹟の一斑であります故に私共大正の禪者は神去りませし天皇陛下と歷代佛祖照鑑の下に懺悔滅罪の門に入り眞如法性の本體を識得し生々世々淨信を專らにして萬事を有難主義に實行することに致したい要は眞實の誠の心から出てたる實行は何事も光明でありますまた花であります、此の光明と花との世渡りは上陛下に對して忠良なる臣民であり、佛祖に對しては善哉々々と呼はるゝ善男子善女人であるのであります。

噫、六千萬の同胞は是の如く上に萬世一系の皇室を奉戴し、寒帶ならず熱帶ならず氣候に於ては中和を得、地質に於ては富饒を極めたる月を以て飾られ花を以て彩られたる娑婆卽寂光の日出國に生を受けたのである誰か歷代の御詔勅を奉戴せざるものあらんや、また誰か佛陀の聖敎を奉信せざるものあらんや、あなかしこ〳〵。

禪の概要

（一）禪とは何か（二）華嚴及天台と禪（三）眞言密敎と禪（四）禪の人生觀
（五）禪の死生觀（六）禪の修養觀（七）禪の信仰觀（八）禪の處世觀（九）悟道の問題（十）結論

（一）禪とは何か

或る町に雨具屋と草履屋とが軒を竝べて商賣をして居た、雨具屋の方では雨さへ降れば店が繁昌するので喜んで居た、然るに草履屋の方では雨が降れば少しも華客が無い、天氣になると大繁昌、乃て雨具屋の方は晴天を嫌つて雨降りを待つて居る、草履屋の方では雨天を嫌つて晴天を喜んで居たと云ふ。

同じ町に住んで近處の親しい交際をして居乍ら立場が違ふと其の考が全く相異して仕舞ふ。人生の問題は何事も其の通りで、同一の事件に對しても全く區々別々で、其人々々によつて決して全同といふ事は期する譯には行かぬ、禪學も亦その通りで、禪徒の境界の如何によりて是れが觀察の仕方、解釋のやり樣にも十人十色の別があるから、例へば禪の分類法に於ても種々なる方面より觀察研究する事が出來るのであるが著者は今、禪學の立場を概說して禪とは何かの問題を解決して見やうと思ふ。禪は元來、殺活自在、回互圓轉、應病與藥て、是が向下應用の自由なる事、他に及ぶ物は無い。

從つて禪其者も種々なる種類に分るゝので支那唐の代、終南山の草堂寺に居られた圭峯宗密禪師（皇紀一四四〇—一五〇一）は是を五種に分ちて外道禪、凡夫禪、小乘禪、大乘禪、如來最上乘禪とせられた。又、六波羅密の內には禪定の項目あり、三學は戒定慧とて定卽ち禪定の一目あり、佛敎各宗また夫々禪の思想を有して居る、加之、世界一切の宗敎は何れも多少は禪に類した思想を持つて居ると云ふも過言てはないが、現今我が國に流行して居る靜坐法とか腹式呼吸とか云ふ如きものも禪の一部てあると解釋することが出來るのて、禪といふことは頗る廣い意味を有して居る、併し乍ら以上の如きは何れも相對禪て禪宗に謂ふ處は實に絕對禪てある、今は宗密禪師の五種の禪を吟味しやう。

第一は外道禪て「帶二異計一欣上厭レ下」の遣方を云ふのて、欣レ上厭レ下と云ふのは近頃の言葉て云はゞ、向上修養しやうと考へることて惡くはないが、帶二異計一と云ふのがいかぬ。帶二異計一とは迷信を懷いてと云ふも同じ事てあるが

いくら向上して行つても、迷信的であつたならば竟に邪道に墮ちて了ふ、今日世間に之れが隨分澤山ある、自己以外に佛を求め、神を建立し、斯世界以外に淨土や天國を夢み憧憬して居る輩が所謂「帶ニ異計一欣レ上厭レ下」する曹て、之を外道禪と云うたのてある。

第二は凡夫禪て「正信ニ因果一欣レ上厭レ下」と云ふ遣り方て欣レ上厭レ下は外道禪と同じてはあるが、正しく因果を信ずると云ふ處が異なつて居る、近頃の言葉て云はゞ、常識を充分に發達させた上に、飽くまて向上修養して行かうとするのてあるからして誠に結構てある、第一凡夫禪と云ふ名からして中々味いがある、唐宋時代の儒者王陽明てあるとか、陸象山てあるとか、周茂叔てあるとか、黄庭堅てあるとか、乃至張商英(無盡居士)、或は程明道、蘇東坡など云ふ歴々の儒者が、皆な深く禪門に歸依し、參じた得力を直に自家の儒教の上に應用して、靜坐として實行して居るが、是等は何れも凡夫禪の實行者てある。實に結構ぢや、どうかお互も大心の凡夫となりて此の凡夫禪を修養して行きたいものてある。

第三は小乘禪て我空偏眞の理を諦觀する小乘機根の輩の修する禪て、此の人間個體、卽ち自分の體は四大假和合て、一々元素に還せば、人我の認むべきものなしと云ふ理を悟るが、自我に對する一切萬有(卽ち一切諸法)の空理を說かないのみならず、自己一人の得脫を圖つて、些の利他がないからして、佛は狐癩野干に比して非常に呵して御坐る。

第四は大乘禪て前の小乘禪に對して、大乘禪と名けられたものて、小乘の我

空偏眞、卽ち個體の空を悟るのみならず、一切萬法（卽ち森羅萬象）は整然と形を存して居るまゝ卽ち眞空なりと、悟るのが大乘禪ぢや。

第五は如來最上乘禪、是は其名の示す通り如來最上乘の禪で一行三昧とも眞如三昧とも、又祖師禪とも云ふ、卽ち直指人心、見性成佛底の法門、吾が達磨宗がそれである。

宗密禪師の五種の禪はざつと以上の如くであるが、要するに禪は心なりて、ゴテ〳〵理論理窟に亘らずして、直に本性を徹見し、心其者を捉へるの修養が禪の遣方ぢや。此心其者を道理の上から說明し敷演したのが敎で、五千四十八卷ばかりではない、洹河の砂の數程の無量無邊の法門となるが、約めて見れば「心」の一字に歸して了ふ、故に經文を百千萬卷調べるよりは直に心其者を徹見する遣方が禪の早路ぢや、何故ならば一切藏經と云うても畢竟此心の一字の註釋に過ぎないので、古來の高僧碩德は何れも自己の心を徹見する事に向つて苦辛慘膽の修養をせられたものである。

此の意味に於いて一切藏經は悉く禪であると云ひ得るから古人も「禪は佛法の總府なり」と稱せられた、併し乍ら學徒に便せん爲、佛敎は種々なる方面より說明せられて來たので、釋尊一代の說法、卽ち佛の敎と云へば中々洪澣で其義理に至つては深く且つ高くして、之を究め盡すと云ふことは容易の業ではない、そこで古來から或は大小乘の二方面に分ち、或は顯密二敎とし乃至聖淨の二門と分類して、研究に便にし佛敎の眞意義の闡明に努めて來た。

今は佛敎を敎と禪と云ふ二つに分けた上から觀察して禪とは何かと吟味しや

うと思ふ、教と云ふのは教相卽ち教理の謂で、後に申す教外に對して教内と云ふ語を用ゐてもよいが、つまり名相を列べて理論的に說明したもので、現時の言葉で云はゞ佛教哲學のことぢや。

禪と云ふのは前の教内に對して教外底で、教理的の說明に亘らずして專ら實修實悟を旨とする方を云ふのである、斯う云ふと直ちに教内教外の二者は各別で、相對峙して居るものかの樣に取る人もあるかも知れぬが決してそうではない、實は教内に教外あり、教外に教内ありて、何れも等しく釋尊の教法ぢや。二つも三つもある譯はない、が强いて玆に分けて佛の教の說明的哲學的方面を教相若くは教内と云ひ、理窟道理の說明に拘らず夫れを超然脫出して實悟を以て則として實踐して行く方を名げて、玆に禪と云ふ。

若し禪の本領第一義上から、教外別傳、不立文字、直指人心、見性成佛と切り出したならば、勿論内の外のと云ふ區別は立たぬ、どうこうと纖毫ばかりも語句を狹む餘地もない、そこで玆には第二第三に下つて禪的思想の概要を說明するのであるから、此の說明を以て直に禪其物なりと解釋したならば、大なる誤りと云はねばならない。

（二）華嚴及天台と禪

前節に於て禪學の立場の大體を說いたから、是れより禪と他の宗旨の教義とを比較して見やうと思ふ、佛教は大乘を以て小乘の上位に列し、大乘の内にて緣起論の究極を華嚴となし、實相論の最上を天臺として居る、而して是等の華

嚴天臺を顯教と稱して眞言密教に相對せしめ、顯密二教を所謂教相と呼んで是を禪と對立するのが一般てある。

乃て今は大乘緣起論の究極たる華嚴と禪との比較をしやうと思ふのてある。

一體禪には教相と云ふことがないのて、其の教義とも云ふべきものは各宗の所說を取り來つて、自宗の說明に供して居るのてあるから、禪の立場から云はゞ如何なる宗派と雖も矛盾しない事になるのてある、殊に華嚴の教理の如きは最も禪宗の喜ぶところ、前述の宗密禪師の如きも、實は華嚴宗に屬する人て、華嚴學の大斗てあつた、殊に華嚴の法界觀の如きは最も禪の解釋には必要な場合が多いのてある。

一體、教法卽ち說法と云ふと、誰ても直ちに口てべら〳〵說き立てることはかりと早合點するが、强ち饒舌ることに限つては居らぬ。說法にも種々ある、佛の說法は凡そ三通り程ある、卽ち身業說法、口業說法、意業說法（或は心業說法、）の三種てある、衆生は此身口意の三を惡用して、罪障を作るが佛は直ちに此三者を爲人度生の上に用ひられる。

先づ身業說法と云ふのは、佛が體を動かしてせらるゝ說法て、佛一切の行動一擧手一投足が直に弟子等の模範となり、規矩準繩となる、而已ならず華一本拈じ出しても、笏一本立てゝも、瞼毛一本動かしても、皆體てする說法ぢや。是が身業說法てある。

次に口業說法と云ふのは、彼是辯を弄するまてもなく舌を動かしてする說法て、佛一代四十九年三百餘會に亘つて、頓漸半滿祕密不定と、縱橫無碍に說か

れたのが其れで、五千四十有餘卷の黄卷赤軸として今日殘つて居る經文が卽ち口業說法を書付けたものぢや。

最後の意業說法と云ふのは體も舌も動かさないで心でする說法、卽ち大禪定に住してする說法で、中々廣大な說法ぢや。體で行ずる說法は、見て居るものだけにしか屆かぬ、口でやる說法は聞いて居るものだけ、僅か數百人多くて數千人にしか亘らぬが、此默然底の心業說法に至つては、そんな小さい狹いものではない、竪に三際に行き涉り、横に十方に遍滿して及ばぬ隈もないのである。

所謂上霄漢に透り下黄泉に徹する底の一大說法ぢや、說者が宇宙に遍滿せる法身を以てするのであるから、聞者も從つて尋常一樣の者ではない、矢張り皆悉く法身の大士ばかりぢや、なんと廣大な說法ではあるまいか、釋尊が成道の後三七二十一日の間、正思惟を行ぜられたと云ふことがあるが、是が意業說法を行ぜられたので、大禪定所謂海印三昧に住して、默々の間に自己所證の境涯、其儘を直ちに說法せられたのぢやが、夫れが華嚴經として今日まで殘つて居る、華嚴の四法界と云うて、事法界、理法界、理事無碍法界、事々無碍法界として、甚深微妙の眞理が說かれてある。以上三通りの說法が佛の敎の全體である。

處が世間では皆釋尊が口で說かれた、所謂口業法說ばかりに目を注いで、他の二說法殊に心業の說法には一向眼を付けぬ、全然看却して居る、而して口業說法の說明的佛敎哲學を捉へ來つて、どうのかうのと批判したり、揑合揑恠して得意になつて居る、實に近眼と云はうか、痴頑の漢と云はうか、若し此くの

如くならば佛法未だ夢にだも見ざることありと云はねばならぬ。そこで華嚴宗のみならず古來から各宗の佛學者が種々に分類して佛敎の研究法を講じて居るが、中に就いて天台大師の方法が、系統も立つて居り組織も比較的完全で、一番其當を得て居る樣である。

天臺大師は釋尊一代の說法を、時間的に分けて五時とし、敎理から觀て八敎として居る、五時と云ふのは、第一が華嚴時で前に申した通りぢや、第二が阿含時で前の華嚴の大說法では餘り高尙に過ぎて、一般の者には聾の如く啞の如くで、一向チンプンカンであつたからして、佛はずつと下つて四諦十二因緣等の小乘敎を鹿野苑で說かれた、是が卽ち阿含の時で、次が方等部彈呵の敎、大小乘の比較說法、所謂方等の時、第四に根本の大智般若の當體其者を說かれた是が般若時で大般若經六百卷がそれぢや、最後第五時に於て唯有一乘法、無二亦無三と云ふ、純圓獨妙底の法を說かれた是れが法華經で、それに涅槃經を合せて、法華涅槃時と云ふ。

八敎と云ふのは、頓、漸、祕密、不定、藏、通、別、圓ぢやが、是等を一々說明して居ては、くだ〳〵しくなるから略して置かうが、要するに以上の五時八敎を、經緯として五千四十餘卷の經文を亢端から調べて行くのが、天台の敎理研究、所謂敎の本領ぢや、處が經文だけが己に五千餘卷もある、夫れに註疏を加へたら萬を以て數へねばなるまい、夫れを人間生涯限りある時間と能力とを以て、果して研究し盡すことが出來るであらうか實に覺束ない話ぢや、先づ假に夫れが出來たとして、夫れだけにて完全十成なりやと云ふに、只佛學者たる

ことは許し得べくとも、未だ眞の佛敎者、宗敎者たることは許すべからずぢや何故ならば佛出世の本懷は、理窟をコネ廻したり、哲學的究理をやることではないからである。

勿論斯く云うても、敎理研究を排斥する譯ではないが、此方法に依つて進んで行つても佛の眞意、到底把捉することは出來ぬ、之を喩へて申さば、一輪の明月が中天に輝けば、其影が到る所の水に映る、水溜りにも溝にも池にも溪にも川にも乃至大海にも……處で其映つた月影を追廻して、何處に映つた月は如何、あそこに映つて居る月はこうと、題りに研究する樣なもので、拈得する能はざるのみにあらず、猿猴捉月と一般、終には水中に溺沒せざるもの稀なりである、假し捉へ得たりとするも、それは月影て月の本體ではない、是等の華嚴天台等の敎相五千四十餘卷の經文も禪より見れば畢竟月を示す指に過ぎぬ、世間多くは其指を捉へて、月の本體ぢやと思うて居るが、爭んぞ知らん眞の明月は、中天に懸つて輝いて居ることを。

扨てそこで此月を示す指に拘泥せずに、直に月の本體を見屆けて、之を捕捉しやうと修養するのが、禪の遣方ぢやが、禪にも種々あつて、前述の如く如來禪あり、祖師禪あり、又近頃は野狐禪と云ふ樣なものも、大分殖えて來た樣ぢや實際に修養しやうとするならば、正しい正宗の禪を修せねばならぬ。

（三）眞言密敎と禪

華嚴及天台は顯敎の頭目であるが、是れと相對立して密敎と稱せられて居る

者は主として眞言教てある、然らば眞言密教と禪との關係は如何になつて居るか、禪は勿論、教外別傳であるから教相には拘らないが、去りとて單に五千七百の公案に精通することてもない。たとひ碧巖や無門關を自在に辨明し證入し得て罣碍なしとするも、禪の一小部分たるに過ぎぬ。然し根機の鈍なるものに到りては、矢張り一階一階ごとに禪意を學得して行かなければならぬ。そこて奚に學人によつて、深淺廣挾の理が自ら法爾として現れて來るのぢや。

要するに禪は佛法の本源だから、これを諸佛の本源、佛法の總府と云うても敢て差支へはないが、若し一句一偈の玄旨に顯はさんとならば、見性成佛の一語に盡くされる。これ以上の説明になると到底言詮不及、打坐して自知しなければ駄目ぢや。こゝが所謂不立文字、教外別傳の當所てある。

密は自性顯得の法を云ふ、爰が最も注目すべき所で、禪密の分るべき一段はこの自性顯得密と見性成佛禪との主張の相違これてある、尤も文字に渉れば百千萬の差別もあるてあらうけれども、縮めて云はゞ是の二途より外に道は無いと云つてもよい。

然しこの兩者の主張について、元來優劣を附すべきものてはないのぢやが、暫く凡夫眼を以て、その何れに長所あるかを辯明して見やう。

先づ見性成佛といふ方から説明して見やうならば、これを一家の相續人にたとへるとよく解る、爰に一軒の家があるとすれば、その家に幾人の子供が居らうが、家を繼ぐべき者は一人てある、かくてその相續人が父祖より相續權を讓與された時に、大家は大家相應、小家は小家相應に、すべて家の附屬物は、自

分の所有に歸する、たとひその主人となるべき人が百千萬の動不動產より、さては家僕下婢に至るまで、名前や使ひ方を知ることなくとも、主人は主人ぢや父祖が「汝に家を繼がしむ」といふ一言にて、家の中の諸事諸作の全部が御當人に知れても知れないでも受渡しが立派に出來るのぢや。然し既に一家の主人公となつて後に、一家を調理して行く方法はその人の賢愚に關係する、賢愚と調理の方法とは常に正比例して居るのぢや、見性成佛と云ふは、丁度相續人が一家の長となりて、家の萬事が知不知にかゝはらず自己の一身に歸するが如く、若し自己が萬法の主體となることに想到すれば法界全部自己の一身に歸して、一微塵も自己に從屬せぬものはないのぢや。

然るに密敎の方になるとこれと反對である、卽ち自性顯得といふのであるから、一微塵の法をも捨つることなく、また取ることもないのぢや、全く焉取焉寫にして、常に記臆の上に存在しつゝ一法をも私することが出來ない所以のものである、故にこれを譬へると一國の將軍か又は會社の監督か、或は商店の番頭の如きものであらう、然し何でも記臆して居るとは雖も、自分で自由すべき意味のものではない、用ゐんとする時に、間誤附かざるやうに單に記臆して置くに止るのである、これが自性顯得である。

この故に從上の諸聖も、出息入息にも間斷なく、この境界に於ては私毫を差挿むの間を容れぬ、これを如の本體といふのぢや、一體密敎家には、理如々智如々、理智如々の三を別して論ずる場合がある、然るに禪宗は最初より理路を離れたものぢやによつて、より以上に幽玄微妙ぢや、故に禪と密とは似て非

なるものと云はなければならぬ。五位ていはゞ、正位にあると偏位にあるといふほどの區別ぢや。正位は禪で偏位は密ぢや、何れの宗旨に於ても、極地になれば法身を建立するやうてあるが、密敎でも、六大法身常瑜伽と說いてゐる、處が禪の方では法身は立てぬ。

故に眞空は我が父母、我が主なりと論じて、我が相用を立てないけれど、空は一切の本源、衆生の根本、所謂萬法皆空ぢや、而してその空の最大功用に到つては、說明の分眼を超越し、大人分上の那人にして初めて了智し得べく、心に間隙を生ずる輩の使ひ得る所のものてはない、然るに密の方になるとさうてはない。自身卽佛の道として、恒に常に臆念心想、皆悉く金剛諸天であると念じ、强いて取捨の心に涉らぬ。それ故に四弘誓願の中にても、禪家及び餘宗は、衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷と唱へ煩惱を除かなければ、成佛することが、難いと說いてある。

然るに密は煩惱無盡誓願斷といふに非ずして、福智無邊誓願聚と說いて居ることを以て若し煩惱無ければ、從つて菩提も知ることなしと知るべきてある。

華嚴敎に「衆生は本て諸佛は末てある」と云うて居る。煩惱の本源卽ち金剛薩埵、愛染不動、三寶荒神等の類、皆これ根本無明の體ぢや、よしや世界が壞るゝことがあつても、この性は壞るゝことがない。故に不動とも稱することが出來、有本薩埵とも名づくることを得べく、また愛染とも變名されるのぢや。この意味から洞山五位の、正位の空界本來物なしといふが如きことをよく熟考すべきてある。禪家に於てはこの位によつて、萬法を主宰するが故に、佛法の

總府、衆生の本源となるの功用自ら求めずして法爾として斯かくなるのぢや。

この理を明らめた上て密を弄ぶ時は、正偏回互して佛魔も容易に覗ふことが出來ぬ。先聖この處に到達するに及んで、羅漢とも名づけ、菩薩とも稱し、佛とも又は大心の薩埵とも云うて可なりぢや、然し今時は堯末にして恰も闇夜の星の如く、容易に斯くの如きの機を得ることが出來ぬ、故に各宗通じて、その一方を建立して居るすら、宗趣共に梗塞して、自ら通づることが出來ぬ、徒に我見互に鋒の如く起り、念佛と法華と爭ひ、禪と教者と非難を交ゆる等の醜體を演じてゐるが、實に憐むべきことぢや。

紙衣道者が或る時、曹山の問に答へて「一裘纔に體に掛つて萬法悉く如なり」といはれた句はよく玩味せなければならぬ。如とは文字の示す如く「あの如く」「この如く」など云はゞ、最早やそれは實物ではないのぢや、和語に「あのやうな」「このやうな」と此例する時の言葉となつて仕舞ふ。これを器物になぞらへると「盃のやうな」「茶碗のやうな」といふやうに、たとひ萬法の上に於て活用の力ありと雖も、すでに本物ではないのぢや、皆これ似たものをさす言葉ぢや。然るに今の道者の言葉はさうではない、法嗅を離れて、靈體一點も私のない場合を答へられたものぢや。所謂、念々臆念心想皆悉く論ずる時は空ではない、人を論ずる時は人ならざるはなく、人法空盡してその間徹底念を存じない。只淨智圓明の體の丸出しの答のみぢや。

何人も口に相似の佛法を云うことは難からずと雖も、日用境界の上に於て、この所在なくしては、脫體も坐脫も心のまゝなるべからずぢや。故に弘法大師

は「般若祕鑰」中に「無邊の生死如何か斷ぜん、只染汚と正思惟あり」と云はれた、そこで此の如を強いて註解せば左の意味となる。般若極致の本源、名の名づくべきは無しと雖も、佛慧と淨心と非相との所依にして、無漏天眞佛の眞相とも云うべきもので、般若二十空中の無性自性空の類と知るべきである。一切の想を離れて、一切想と均しく混然として有るが如く無きが如く機に應じ變に隨つて自在無碍、故に如々といふのみである。

般若多羅尊者の「出入に涉らず、如是經を轉ずること百千萬億卷」で虛空一枚の深般若である、紙衣顯得も亦復かくの如しである。金剛眼と金剛の杵とを握つて正位に坐する時、初めて諸佛の主となられる故に佛魔共に膽を喪するのである、されば禪者が密を學得し、密者が禪を學得すれば角あり牙あり、人中の龍、天中の天、佛中の佛陀、利益衆生十萬八千、前三後三數量に涉らぬ、又心王心數何の隔りかあらん。紙衣の見地活機の鋒、佛魔如何てか當らむやと云ふ偉力を顯すことが出來るやうになるてあらう。

（四）禪の人生觀

是より以下禪其物の說明をしやうと思ふ、先づ禪にては人生を如何に見るてあらうか、蓋し無我は禪の人生觀の根柢であらうと思ふ、肆護士の濱地八郎氏は自ら天松居士と申して居られるが、此人はなか〳〵僧侶も及ばぬ程の佛敎篤信の方て嘗て曹洞宗の西有禪師や日置默仙禪師、又た臨濟宗では勝峯大徹和尙等に參得をして、禪の造詣も至つて深いのてあるが、此人の信仰の標準として

居らるゝのは卽ち金剛經であつて、二十年來一日として讀誦せぬ日とてはないので、裁判所へ出勤するにも手に離さぬと云ふ位熱心である。

隨つて此經の廣大なる功德に感觸したことも幾回なるかを知らぬと云ふことから、此の經恩に報答したいと云ふので、金剛經の主眼たる「無我相」の三字を書記したのを八萬四千人より集め、金剛塔を建立して生者の爲めに福壽無量を祈り、死者のためには追善菩提の回向をしたいと云ふので、先年の十二月其事を發願せられた所が意外に澤山の隨喜があつて、續々其の寄贈を得たので、其の數拾萬からに達したことであれば、愈々土地を東海道大船驛の後ろに選定して、無我相山と名け、既に假堂の建立も出來て入佛の式も致し、須達長者が祇園精舍を釋尊に奉施したるが如く、佛敎布演の道場として之れを日置禪師に捧げ、遠からぬうち金剛塔建設の目的を達したいと云ふことになつて居る由なるが、此處には釋尊を本尊として特に金剛尊天が勸請致してある。

所がこの尊天に祈願する時は、難病業病等に苦しむものが不思議に平癒するので、日々信者が增して居るやうな次第であるが、扨此の金剛經と申すは、僅か六千字位の御經であるけれ共、實に佛敎の妙旨と人生觀とを簡潔に說き盡したものである、故に支那では一時非常に世に弘まつたもので、八百人も註釋を書かれた位殊に十七家註杯申すは今に傳はつて居る程のことであるが、さて此經の主眼と申すは「應に住する所無うして而かも其心を生ずべし」と有つて卽ち無住と云ふことが大切になつて居る、而して其の無住の所を說明して「我相も無く、人相もなく、衆生相も無く、壽者相も無し」と申して、それをつづ

めて見れば結極無我相と云ふ一つの意味になるので有る。

抑も此の我と云ふのが人生に於ける迷の根源であつて卽ち凡夫根性の土臺である、左れば佛敎と云ふものは、元來理屈が目的ではなく實踐修行が目的であるが、其實踐の目的は斷惑修證と云ふことであつて、所謂惑を斷滅して眞理を證得することでありますが、其の惑と云ふことは卽ち煩惱のことであり、而して煩惱の種類は八萬四千と申すけれ共、つまる所は貪瞋痴の三毒で、三毒は復た愚痴の一つが根源であります、此の愚痴を名けて無明と云ふのである、此の愚痴の無明が地水火風の假りに和合した此の身に對して我見を起し、遂に我執を生じたのが卽ち迷の始まりで有る、故に佛道修行には、五十二段の階級、三祇百劫抔と長い期間が設けてあるけれ共、結局の所は只だこの我執の根源を斷ち切るまでの骨折りである。

全體我とは如何なる意味であるかと云ふに、佛敎では常一主宰の義と申してあります、常一とは五十年なり七十年なり自分と云ふ肉體が續いて存在せるやうに思はれること、主宰とは自在の義にして、何處までも自分勝手のもの丶樣に思ふ考へて、斯樣な意味が何處までもあるもの丶樣に思ひ込んだ一念が卽ち我執と云ふて有ります「引きよせて結べは柴の庵なり」と云ふ、彼の假りの柴の庵の貌に實有の考へを抱いて居るのが凡夫の愚痴て有つて、元來柴の結を解いて仕まへば庵の貌はあるものては無いが如く、人々此身の骨は骨、皮は皮と調べて見れば全體我と云ふものが何處にある、故に佛敎には此の我を情有理無と說いてある、それは凡夫迷情の考の上に假りに有るまてのもので、道理の上

には全く無いと云ふことである。

然るに、お互に其の理無の方には更に氣がつかず、情有と云ふ假りの名の方に迷うて、實に我と云ふものがある樣に執着致して居ります、されば其の自我を滿足する爲めには我慢我欲を增長して、遂ひに自分と他人との隔てを生じ、人よりも先づ己れがと云ふ考へが出來て、或は個人主義だの、自我の滿足だのと云ひ出されて、其の自分の慾望を滿足する爲めに社會の公德も破り、人道の大義も無視する所の罪惡も造らるゝに至るので、彼の新聞の第三面に表はれる醜惡なる罪跡は、已べて之れより外にはないのであつて、恐れても惶るべきは人生における我相の迷執て有る。

そこてお互今日の情有の假相に執着して樣々の罪惡を構造するのは、恰も土人形をとらへて男であるの女であるのと爭論する樣なもので、之を破棄して了うて元の土に復せば元來男女の相は有るべきものではないが如く、情有の執着を離れて理無の眼より人生の眞相を洞見すれば本來空の無我相である。

所で、此の無我相と云ふ三字を解釋するに單に我相が無いと云ふ意味斗りに申しますと如何にも消極的にのみ聞へて何にもかも捨鉢主義に成度なる樣な感じがするのてありますが、それては又却つて佛敎の本旨てはありませぬ、之れて一旦は我の根を截斷して、無我に達したる以上は更らに積極的に我相を復活する所に佛法の活動を云ふものがある、此の時は卽ち無の我相と云ふ意味てあつて、釋尊が「三界は我が有なり、其の中の衆生は吾が子なり」と仰せられたる如き、同じ我がと仰せられても凡夫の己れが我れがとは大變な違ひてありま

す、故に我相も斯様になりますと、今まで罪惡の道機て有つたものが、反つて善根の道具となり、今までの利個主義は忽自利利他の圓滿なる大慈悲心と働く様に成ります、之れを禪の言葉で申せば大死一番大活現成で、一旦我見の根源を截斷して更らに無我の我に復活し公平無私の大活動を致すのてある。

之れを喩へば、一個の物品に就て自分一個のものと限られて居る間は欲深な根性から爭ひの種子ともなるが、己人の手を離れて共有物品ぢやと云ふ事に成ると、自分も他人も平等に應用が出來て活用が無邊てある様なものてあつて、同じ我ても無我の我になれば斯様なものてある、全體人生における利他と云ふことは必ず平等心より起るものて、其の平等心は卽ち無我相てなくては起るものては無い。

聖人に己れ無く、又己れならざる所は無いと申してありますが、此の己れなしと云ふことが卽ち無我相てあります、無我てあれば何れの方へ向つても、己れならぬ所は無いのてあるから、自他不二、怨親平等にして人の苦しみは我が苦しみ我が苦しみは又た人も苦しむと云ふ實に美しい平等不二の感があるのてあります、それて佛菩薩は衆生の苦しみを見て人の事と思はれぬ故、廣大無邊の大慈悲心が起るのて、彼の維摩が衆生の病を己れの病とした様なものてあらうと思ふ。

總て凡夫は、己れを中心として人生を觀じ定規を定むる故に、兎角順逆の境相が出來て來て順境は愛し、逆境は憎むと云ふ隔てのある人生觀が出來るされは一旦我見を解脫して無我の實相に該當する時は前申す通り己れならざる

所はないから、何をか愛し何をか憎まんやである、故に道元禪師の所謂「德有るは讃むべし、德無きは憫むべし」との仰せの實行は、眞に無我の大慈悲心より發したるものである。

故に一度無我の活眼を開いて、五蘊（五蘊とは吾人の身心を云ふ）皆空なりと照見し、萬行を空華の如く觀ずる時、彼の白樂天が申した如く蝸牛（かたつむり）角上に何事をか爭ふと云ふ樣に成る、此處に至つて、小は一家の平和となり、大は國家の安寧より乃至法界平等利益の光明が人々の造次顚沛の間に現はれる。而かも此時に於ても別に何等の異りたる面目は無い、鳥飛んで鳥の如く、魚行いて魚に似たりてある、抑は綠花は紅、臣は君を補け子は父に順ずる至道無難の佛法現前てある、之れを眞の金剛般若と云ふのてある、故に眞の般若は文字では決してない、十方世界に大光明を放つて居るものてあります、盲者の見ざるは日月の過にあらずと云つて、彼の日月の光明を見ることの出來ぬは、盲者に眼が開いてないからてあります、吾人が此の般若の光明を見ることの出來ぬのは矢張り盲者日月の光りを見ることの出來ぬのと同樣に、般若の大光明を見ることの出來ぬはつまり無我の活眼が開いていないからなのてはあるまいか。

皆樣、無我の眼を開いて人生を觀ぜんには、人々己が心を降伏せねばならぬ其の自己心を降伏するとは外てはない、卽ち人生に處する上の清淨無垢なる心持て有る。故に「自ら其の意を淨うする是れ諸佛の敎へなり」と申して居る、故に皆樣は一月元旦よりして淸らかなる美しき心を失はれなかつたならば、一

年三百六十五日、日々是れ好日裏に金剛經の讀誦が出來ると云ふことになるのである、而して是れ實に禪に於ける正當なる人生觀を實行せるものと云ふべきであらう、吾等は更に進んで禪の死生觀を一瞥しやう。

（五）禪の死生觀

死生は人生の重大問題である、我が禪門に於ては此の重大問題を如何に見るであらうか、吾等は是れを敎祖釋尊の上に就いて觀察を下さう、二月十五日は釋尊入涅槃の聖辰である、釋尊は此の夜半に於て末後の一着を打し泊然として大寂に歸し給うたのである、當時の光景は錄して諸經論に在る、知らず、禪に於ける死生問題の公案は什麼。

『世尊涅槃會上に於て手を以て胷を磨し、衆に告げて曰く、汝等善く吾が紫磨金色の身を觀よ、膽仰取足して後悔せしむること勿れ、若し吾れ滅度すと謂はゞ吾が弟子に非ず、若し吾れ滅度せずと謂はゞ亦吾が弟子に非ず』

見よ、釋尊最後の公案、明々白々たること是の如し、大道に古今なし佛性豈に生滅あらんや、凡夫は之れを執して死生ありと爲す故に生を愛し死を憎みて遂に生死の根源を究明することを得ず、二乘は生死の問題に迷ふ故に生を捨て死を取りて遂に生死の實相を知見することを得ず、之れを實有なりとする元と是れ迷ひ、之れを實無なりとする亦悟りに非ず、有無の兩端に滯らば永く生死の何物たるを識得するの分はない、或る一類の人は「身死すれば靈も亦滅す、唯だ業力のみありて相續す」と、是れ因果無人說を錯會して强て之を無我の眞理

に擬せんとし、知らず識らず斷見の窩中に投じた者である。

或る一類の人は「身死するも靈死せず、肉體は籠の如く精神は鳥の如し、死の狀態は鳥の籠を脱するに似たり」と、是れ輪廻轉生等の說を誤解して强て之を佛性の妙體に擬せんとし、知らず識らず常見の鬼窟に落いりし者である、仔細に觀じ來れば何れも其の根本に於て一大謬見あることを免れぬ、釋尊曾て紫磨金色の胸を指し衆をして之れを觀察せしめられたとある、今日も亦た斯の如く、驀直に自己を返照して、卽今吾等の身心是れ生か、是れ死か、是れ常住か、是れ無常かと工夫して見よ、又直下に宇宙を把捉して、天地日月、森羅萬象の當相、是れ生か、是れ死か、是れ常住か、是れ無常かと點檢して見よ。

若し生と謂はゞ那裏よりか生ず、若し死と謂はゞ何によりてか生々化々して暫くも停まることなきや、若し無常と謂はゞ其の實體將た何物ぞ、是の如く審細に生死問題に參じ去り究め來らば、生と謂ふ可からず、死と謂ふ可からず、常住と謂ふべからず、無常と謂ふべからず、故に道元禪師は「生死卽ち涅槃と心得て生死として厭ふべきもなく涅槃として欣ふべきもなし此の時初めて生死を離るる分あり」と仰せられた、苟しくも佛弟子として佛陀の眞面目を知悉せんと欲せば、先づ須らく斷常の二見を放擲して、驀直に生死の實相を徹證せざるべからず。又

『世尊入涅槃に臨み、文殊大士佛に再び法輪を轉ぜんことを請ふ、世尊咄して曰く、文殊吾れ四十九年に住じ未だ更に一字を說かず、汝吾れに再び法輪を轉ぜんことを請ふ、是れ吾れ曾て法輪を轉ぜしや』

と松は風を迎へて吟じ草は露を滯びて泣く、是れ皆宇宙微妙の說法である、富樓那の辯舌も梅花一點の紅唇に擬すべくもあらず、王摩詰の筆も人心奥底の情趣を寫し出すに由なし、故に文字以外の文字を讀破し言句以外の言句を貼取する底の客に非ざれば與に佛敎の精華を談じ禪の死生觀を語ることは出來ぬ、若し夫れ大乘小乘の法相に拘泥して妄りに頓漸顯密の勝劣を爭ふが如きあらば徒らに葉を摘み枝を尋ぬるの活計に勞して遂に直截根源の靈機を撥轉することは能はじ、釋尊の身心は既に宇宙と同和し、天地と融合するを以て、其の一動一靜一言一行盡く是れ天眞の妙法ならざるは無い。

悲しい哉、凡少の衆生は己れに迷うて物を逐ひ、空中幻影を固執して憎愛取捨の妄情に礙えらる、釋尊之を愍みて善巧方便を打し、或る時は空と說き或る時は色と說き或る時は眞諦を示めし或る時は俗諦を示めす、要するに衆生をして從前の妄執を打破し本性の智德を開發し死生を洞觀せしめんが爲めに外ならぬ。然るに其の說相に粘縛せられて岐路に彷徨し去らば、釋尊に辜負することは大なるべし、是を以て釋尊最後に至り四十九年一字不說と仰せられたるは、三百餘會の說法を抹殺し玉ふにあらずして、直下に佛敎の大精神を發揮し三千餘卷の經典をして大活現成せしめられたのであります。

近世曹洞の宗匠たりし尾州名古屋萬松寺珍牛禪師江戸牛込に僑居の際、駒込栴檀林（曹洞宗唯一の學寮）の寮主大寅和尙、正法眼藏の提唱を拜請せんが爲め禪師に謁して拜を設け具さに來意を叙ぶ、禪師兀坐端然徐ろに告げて曰く「山僧が一動一靜何れか正法眼藏にあらざる」と。和尙大に感悟して益々其の高風

に服膺せしと云ふ、是れ亦無説の説、不言の言である、獨り佛敎のみならず、其の妙處に至りては諸道皆な然らざるはないのです。

柳生宗矩眞影流の劍法を能くす、澤庵禪師に參ずるに及んで愈々其の妙術に達した、曾て家光公に見えける時「凡そ術は唯だ調練思慮して以て自得すべきである、臣嘗て師に就き禪に參じて頗る感ずる所あり、業稍々進むに及び不可言の妙あるを覺ゆ、因つて禪に依りて悟道するに若かず」と申しければ、公甚だ之を悅び遂に宗矩の薦めを容れ澤庵禪師を請して心術の師となした。

況んや佛敎深甚の妙理は到底依文解義のみではいかぬ、されど文字言説を排斥するものと想ふべからず、若し一度び妙理に通達し去らば、一切の言説一切の文字盡く妙ならざるはない、故に古人も「言語道斷とは一切の言語是れなり不立文字とは一切の文字是れなり」と云うた。之を喩ふるに佛法は猶ほ一箇の壯大なる邸宅の如きものである、邸宅の結構たる、書院あり接賓あり、食堂あり寢室あり、門戸あり墻壁あり、庭園あり泉石あり、此等を完成して配合其の宜しきを得、裝置其の便りに適するを要す、若し食堂や寢室のみを以て之を邸宅なりと稱せば、誰か其の愚を嗤はざる者あらんや、然れ共も其の食堂と云ひ寢室といふも決して邸宅以外の物にあらず、寧ろ邸宅中の必要なる建築物である如きものではありますまいか。

釋尊所説の法門も亦た是の如く、眞諦あり俗諦あり、理性あり事相あり、此等の敎法を總合して以て一大佛敎の邸宅を建設せられたのである、若し眞諦の一隅を守り或は俗諦の一方に偏して以て佛敎なりと云はゞ株を守つて兎を待つ

よりも愚かなり、併し佛敎の全局面より見る時は、眞諦俗諦、理性事相、一として、佛敎ならざるはない、故に全局面を達觀して佛敎邸內の主人公と爲るのが禪の本領である。是れを以て禪以外に聖道淨土の法門あるに非らず、若し此の意を體得せば方便も卽ち眞實となり、多門も亦た一門に歸すべし、然からざれば實敎も却つて權敎となり佛法も亦た世法に流れ去るべし、さすれば一字不說の一着子こそ實に是れ釋尊の活骨髓である、釋尊は涅槃會上更らに一段の神通を現じて我等が爲めに佛向上の公案を示めし玉うた。乃ち傳に曰く

『世尊入涅槃の日、迦葉尊者最後に至る、世尊乃ち棺中に於て雙趺を露らはして之れを示す、迦葉尊者乃ち作禮して如來三昧の火を以て而も自ら闍維（又は荼毘といひ此に焚燒と譯す、卽ち火葬のことなり）し玉へと請ふ、卽時に金棺七寶の狀より昇り擧りて、俱尸羅城を遶ること七匝して本處に還りて、火光三昧と化して而して自ら之を焚く』

此の一段の因緣、涅槃門頭の遊戲三昧たり、之を以て佛陀の奇蹟として釋尊にのみ靠せかけてはならぬ、火光三昧とは佛知見である、佛知見とは本具佛性の妙德である、妙德顯現すれば妄想の幻影を一掃し生死の窩窟を粉碎して更らに一塵の認むべきは無い、此の時釋尊の法身は無限の時間を一貫して妙用至らざる無く、無限の空間に充滿して功德廣大である、是を金棺の旋轉無礙と稱する然れば吾等が參禪一回して妄想の攀籠を脫し去らば如來の法身常に在して滅し給はず、佛陀の寶棺は吾等の脚跟下に在轉右轉して、自を度し他を度し利濟窮りあるべからず、故に苟しくも禪に參じて其の死生觀に體達せんと欲せば、釋

尊に對して生滅去來の妄見を立せず一代の聖敎をも一口に呑却し去りて驀直に宇宙に遍在する佛數の大文字を讀破し、不言の大法輪を聽取し、是を日用光中に運用せんことを要す、能く恁麼なることを得ば、釋尊の壽量は天地と與に窮盡せぬと同時に吾等の法身も宇宙と共に悠々無際となるでありませう。

（六）禪の修養觀

既に禪の死生觀を說き終つたが、然らば斯かる死生觀に體達するの方法は奈何、是れ卽ち禪の修養である、私は是に禪の修養觀を述べやうと思ふ、蓋し禪的修養に於ては不忘念の精神が最も大切なのである、釋尊一度人生の化緣つき度生を終りて沙羅雙樹の間に於いて、涅槃寂滅の雲にかくれさせ給はんとするや、座下に大衆を集めさせられ、諸々の比丘衆のために一大法筵を開いて御敎へになつたのが、卽ち是れ遺敎經であります。

而して「八大人覺」とは此遺敎經を各段に分つて說明せしものにて、遺敎經は取りも直さず、八大人覺であつて、八大人覺は又これ釋尊の大慈大悲の雫りであるが、我が國では曹洞宗の開祖、道元禪師は又、御入滅の前に當つて、說かれたる御敎訓ありて、「正法眼藏八大人覺」と稱して居る、然るに曾つて鈴木充美氏此の八大人覺を刊行し、「釋尊遺誡八大人覺」と命名して、廣く有志に頒布せられた。私も又、一本を得たれば披らいて見るに、初めに道元禪師の述あり、附錄としては新井石禪師が述なる「禪學上の八大人覺」を載せてあつた、私は此の八大人覺を少しく述べて禪の修養觀に及ばうと思ひます。

八大人覺の文言は、何れも皆、金科玉條であるけれ共、其内で吾等の尤も修養訓にするに足る箇條は「第五不忘念」である、是れは又は「守正念」と名づけ、法を守つて失はぬことである、佛の言はく「汝等比丘よ、善知識を求め善護助を求むるは不妄念に如くは無い」と、げに妄不念こそ吾人日用の修養底で又禪の修養觀である。されば坐禪で云ふ非思量底とは實に是れ、此の不妄念に外ならぬのである、思量に渡る勿れと云うても、決して思量を無することに非ず、されば云つて、無暗矢鱈に思量の向ふに任せおき、勝手氣儘に妄想分別するにも非ず、そこは所謂非思量底の存在する所以にして、換言せば正念を相續し行くことである、正念を相續して、更に妄念に走らず、念を忘れざるこそ大聖釋尊の教へ玉ひし、五欲の賊中に入りても、更に恐るゝ所なき、念力堅強降魔の鎧であらうと思ひます。

今ま此の不妄念と云ふことを、例を以て云つて見やうならば、所謂「男子立レ志出二鄕關一、學若不レ成死不レ歸、埋レ骨豈期二墳墓地一、人間到所有二青山一」の詩の如く、一度志を立つて鄕關を後に、旅路はるかに出で去るや、業もし成らずんば、吾れ死すとも歸らざるべし、人間到る所に青山あるものを、何ぞ戀々として墳墓の地を期するものぞ、との決心は甚だ美なりであります、此の心を堅く胸に祕めて妄れず、千難に遇うて屈せず、萬災を見て恐れず、向ふ所は水火も辭せずして進み行くもの誠に是れ不妄念であります、不妄念ある所、山くづるゝとも、大河押し來るとも意としないのである。然るに一度、足は紅塵萬丈の帝都の地を踏んで、心は淫風吹きすさぶ都大路の習俗に染まるや、初志こ

こに變じ、心機忽ちに一轉して、あたら有爲の青年も遂に果か無く空手還郷の嘆をもらすに至ることあるは、實に是れ此の不妄念と云ふ正念相續の修養が無いからのことであります、げに大切なるは正念相續ではありませんか。

人は心が大切である、外いかに吾れを責むるに正義道德の法を以てするとても、内に心の邪なるあらば、千言萬語の訓誡も、蓋し蛙面水たらずんば鹿角蜂に終らんのみ、正念相續の要は實に玆にある、故に禪徒たるものが善知識と云ふ先生を求めたり、善護助と云ふ保護し助長して呉れる人を求めんとならば先づ〳〵自己の本心を顧みて、吾れ果して不妄念なりや否やを驗せねばならぬ自己の本心に於いて邪惡なるものが、外面だけに善知識を求めたり、表面だけ善護助を求める樣な風をしても、何にも成らぬではないか、自己の本心、正しからずして、是れを敎ゆる人の非をあばき、己れ行はずして人を制せんとす、是れ徒らに勞して功なきものであります、人は須らく、他を責め他を論ずるに先んじて、己を責め己を論じ、自己果して不妄念に住するや否やを質して、然る後に善知識も求めやうし、善護助も得べきであらうと思ひます。

若し夫れ眞個に不妄念に住するならば、外界よりは、諸々の煩惱の賊せめ來るとも、吾人の心中に入ること能はず、如何に五慾のために引かるゝとも決して是れがため、動搖せられ、誘惑せらるゝことは無いのであります、是の故に人々は、常に正念を攝めて胸におき、分秒の短かきも油斷をなさず、五慾の賊のために害せられざらん樣に、心がくることこそ肝要であります、武裝堅强の武士は、決して弓矢に當てられず、盾の强よさは矛また破り得ぬを思はゞ、げに心

すべきは不妄念の護持ではあるまいか、吾れ已に斯くの如く誓ふ、たとひ千萬無量の魔軍が押し來るとも、降魔の劍の一擊に打ち亡ぼさんづる覺悟こそ、修養する人の銘鑑であるのであります。

さは云へど、人は矢張り人にして、五慾の炎は何時とは無しに燃え起り、煩惱無明は常に湧く、金もためたく、名もほしく、あらぬ慾望は止む時なくして繫縛の綱は人を攻めるのであります、假令、修業し得たりと云ふ人にても、時に或は五慾起き來らずとは限らない、併し乍ら、一度誓ひしことは決して忘れず、初一心を貫徹して、最初の念を大切にし、起き來る妄想心を抑さへ付けて行くことならば、何時かは、初念が後念に勝つて、最後の勝利が得られやう、只それ最後の勝利であります、此の最後の勝利こそ不妄念の賜であります、中途挫折は實に是れ不妄念がないからのこと、されば人若し修養の第一著は何ぞと問はゞ、私は不妄念であると答へるのであります。

已に前述の如く、不妄念とは、先づ將に大に誓願を起し、その誓願を嚴守して、更に他のために心を奪はれず、よしや又一時は他のために心を引かるゝことあるも、初念を貫ぬいて突進し、念を失することなく修養して、是れを心に納め、あく迄、初めの考へて押し通すものだとしたならば、是れ卽ち孔子の所謂、克己ことに非ざるか、不妄念とは誠に是れ克己なのであります、克己ある所、如何に邪念が起るとも、或は如何なる障害が目前に迫るとも、是等の邪念や障害を打ち破つて進むのである、外界より來る惡障邪魔は尙ほふせぐべし心內より起る邪魔者は只だ此の克己に依るの外はない、不忘念を離れて自己の

精神を正しうして行くものは外にないのであります、是れを換言せば廻光返照して自己之れ如何と考ふる所に、不忘念の新生命はあるのであります、廻光返照して而かも進みに進む、是れ尤も堂々たる修養法であります。

以上のべ來りし所は正念相續と云ひ、不忘念と說き、克己と述ぶるとは雖も觀じ來れば修養の理論のみ、道の道たる所は實行にある、吾等の日用行中こそ大切なれ、況んや參禪辨道の士に於てをや、若し夫れ參禪の士たるもの、能く此の正念相續を實行せば、案頭卓邊、とりも直さず枯木堂となるであらう、船中車上も又た是れ一つ坐布團の境介となりぬべし、行も亦た禪であるし、坐も亦た禪である、語默動靜、體安全の大風流は、獨り不忘念にのみ依つて得らるべきものであらうと思ふ、一言にして云はゞ、禪の眞面目、佛道の奧儀、宇宙の妙法も、只だ此の不忘念の修養に依つて初めて獲得し得るのである、私共もどうか不妄念に依つて體安全の妙風流を得たいものです。

上來、いろ〳〵と說明をしたが、つまる所は「不妄念とは如何なる事か、不妄念の功果は奈何であるか、不妄念は何故なくてはならぬのであるか」と、深く我が一身上に就いて返照し、以て大に修養すると云ふことは、禪徒として最も大切な事である、若し不借身命に此の修養をしたならば、必ず禪的安心を得ることが出來るであらう、進んで禪の信仰觀を述べませう。

（七）禪の安心觀

次には禪の安心觀を述ぶる事とする、凡そ禪的修養の目的は實に禪的安心に

到るにあるので是れぞ宗教道德に於ける修養の特色である、中峯禪師の語に「禪は玄學にあらず、奇解にあらず、密授にあらず、祕傳にあらず、是れ衆生本有の性にして本と是れ諸佛の證せし所の三昧なり」とある、されば禪の安心を以て一種不可思議の物體を詮鑿するものゝ如くに思ひ、又は常識を以て測量し難き格外の知見を獲得するものゝ如くに思ひ、又は神祕的のものゝ如くに思ひ、又は劍術遣が虎の卷を直傳するやうな祕密の相傳でもあるかの如くに思ふのは皆な謬見である、禪は正しく自己を自覺し自己の實相を見破するの法門である、否禪そのものが直ちに自己實相の露見なのであります。

自己本來の實相は工夫を勞せざるも從來曾つて藏すことなく、吾等の頭上より脚下に至るまで一毛一髮も實相ならざるはないのである、一擧手一擧足の上にも無限の神力あり、無量の光明ありて千佛萬祖の偉德妙用と寸毫の別はない、然るに悲しい哉吾等は終日實相に對し乍ら而かも終日實相に背き、徒らに顚倒夢想のために使役せられ枉げられて煩惱業障に繫縛せられて居るのである故に自己の實相を見破せんと欲せば先づ以て顚倒の見、妄惑の縛を脫して安心を得るの工夫なかる可からず、是れを以て入禪の初めには從前の分別思想を打破するを要するのである、道元禪師は『請ふ試に意恨を坐斷せよ、十に八九は忽然として見道を得ん』と仰せられ又は『善惡を思はず是非を管するこれ勿れとも仰せられたのである、汚れた座敷を掃除せんと思はゞ室內に所有物品は善惡を論せず一旦は室外に持ち出し、其の內を空虛にするのが捷徑じや、穢れた身體を洗ひ淨めんと思はゞ、一度は穢れたる部分と穢れざる部分とを擇ばず

是も非も齊一に沐浴し去るのが肝要じや、若し是を存して非のみを捨て、善を留めて惡のみ去らんとせば縱ひ驢年に至るとも容易に洗淨の目的を達することは能はずして、いつの間にか是非善惡が紛然として雜起し、竟に掃除の功を奏することは出來ぬものじや、故に達磨大師も入道の方術を授けて「外諸緣を息め內心喘ぐこと無く心牆壁の如くにして以て道に入るべし」と御指南下されたのである。

然るに世の禪容を觀るに中々此禪定を實修して安心を得やうとするものが少ない、縱ひ之れ有りとするも曉天の星の如く極めて稀有である、誰やらが今時の禪容を評して「外諸緣を攀ぢ內心頻りに喘ぎ心猿猴の如くにして以て益々道に背く」と云ふ惡口を云ふたが、動もすれば是れを以つて適評なりと云はねばならぬ事もある、是れ必ずしも禪を修する者のみの失にあらずして、全く人間の通弊なのである、此弊習を破らんには禪の敎育者卽ち師家其人を得ることゝ參禪者の士氣猛烈なることとが主要である、さなきに於ては所謂公案なるものを授けて工夫の力を專一ならしむべきである、然し此の外に最も必要なる一事あり、乃ち信念の發得である。

信念は宗敎の基礎じや、信念なき時は宗敎を究め盡して玄微に徹することを得るとも、之は所謂宗敎學者にして宗敎者には非ず、例倫理を究め道德を講じて麤に入り細に入ることを得るも、其の性行にして道德的ならざれば、倫理學者と稱すべきも、道德者とは云はれぬ樣なものじや、殊に佛敎に於ては「信念なきものは手なきが如く寶山に上るも其寶を取ること能はず道の元功德の母は

唯信に在り」というてある、然るに禪客には比較的に信念が薄弱でありはせまいかとの恐れがある、前に釋迦なく後いに彌勒なしと云ふ見地に依りて唯だ漫りに對境一切を掃蕩せしむるの餘り知らず〳〵信念の修養を忽諸に附する傾きがあつてならぬ。

唐の宣宗皇帝が未だ即位せざりし時、難を避けて出家となり暫く藍官禪師の會下にあらせられた、其頃黄檗禪師は會中の第一座であつた、一日黄檗佛殿にありて頻りに佛を禪す、宣宗見て問うて曰く「佛に就て求めず、法に就て求めず、僧に著いて求めずとは維摩經の所説にして禪僧の眞面目ならずや、然るに長老は恁麼に禮拜す、知らず箇の何をか求むるや」檗曰く、「我れ元來佛に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、一切求むる所なうして是の如く禮するのみ」サア宣宗は一向に其意を解せぬ、求め無うして佛を禮す、佛を禮するも曾つて求むる心なし」どうしても解らぬ、ソコで「若し果たして求むる所なくんば禮拜するには及ぶまい」と詰られた、すると檗はいきなり一掌を與へられたとある。

此等の公案は深く翫味して黄檗の眞意を把捉して見るがよい、佛を信じて佛心に證入し佛と我れと二面なき時は能信の人と所信の佛と圓融して間隔あることなし、是れ即ち黄檗の信念である、一遍上人が「唱ふれば我も佛もなかりけり、南無阿彌陀佛の聲計りして」と詠ぜしも此の信念の表白に外ならぬ、此の信念現前する時、感謝の念内に發し報恩の行外に露はる此の信念無罣礙なるを以て君に對しては忠となり親に對しては孝となり、衆生に對しては慈悲の行願

となる、此信念不染汚なるを以て惡を避くるに意なうして自ら惡を退き善を修むるに心なうして善自ら聚る、是れぞ正しく心地無相の佛戒じや、禪門十六條の大戒も收めては這裡に在るのである。

禪門正統の祖師、西天の十二祖馬鳴大士は「起信論」を著はして正信心を示され、乃ち四種の信心を發起すべきことを說き玉へり、其四種とは根本を信ずると佛法僧の三寶を信ずることとである、根本とは萬法の根源宇宙の歸起趣ぢや、道元禪師が「佛法を信ずるものは須らく自己を信ぜよ」と仰せられしも信根本の說示である。

次に三寶とは眞如の妙德妙用に外ならぬ、自己をして三寶に歸命せしむる時吾人の身心及び天地法界を擧げて三寶の大海に投入し自己をして三寶たらしめ三寶をして自己たらしむるのである、されば支那禪門の三祖鑑智大師は信心銘一篇を著はして達磨直指の妙道を開示し、吾人をして信行の正經に迷はざらんことを得せしめらた、而して最後に於て、『信心不二、不二信心、言語道斷古來今に非ず』と仰せられてある、不二とは自己と三寶との妙合融化じや、此の端的は自力他力を以て論ずべからず、往相還相を以て擬すべからず、信心直下が是れ禪てある。

參禪若し此の信心を解如せば、百千の公案も一具の葛藤たるに過ぎぬ、浩々たる商量も遂に戲論の業たることを免がれざるべし、華嚴經には三寶歸依の目的を明にせんが爲めに左の願文を示し給ふたてはないか。

『自ら佛に歸依し奉る、當に願はくば衆生と共に、大道を體解して、無上心

を發せん、自ら法に歸依し奉る、當に願くば衆生と共に、深く經藏に入りて智慧海の如くならん自ら僧に歸依したてまつる、當に願くば衆生とともに大衆を統理して、一切無擬ならん』

と、是れ正しく歸依禮讃の表白文である、吾人は日々夜々此文を稱へて信念を增進せねばならない「自ら」と稱すと雖も自力他力の論量に涉つてはならぬ、所謂自他一如の大信念であるのじや、佛法僧と一如なる時は衆生とも亦た一如となる、徹底衆生と一如なる時は自己信念の功德は自づと衆生に大利益を施すものである、恰も公明正大にして慈悲深重の人ならば、自己に蓄積する財產がやがて國家の富力を增進し社會の窮乏を賑濟するの威德あるが如きものぢや、三寶と我と感應する底の人にして始めて衆生と我と感應することを得べし、是に至りて信心卽慈悲である。

利己とか利他とか云うて議論してゐる間は眞箇の信念も慈悲も安心も顯現するものではない、世の宗敎を談し道德を議し安心を論ずるの君子は能く〳〵此の消息に通ぜざる可からず、是の如き大信念を發得して而して禪に入り禪に住す、是を眞禪と云ふ、是れ卽ち自己の實相の露現である、六祖大師は佛法僧を指して自性の三寶と稱し「佛は覺なり法は正なり僧は淨なり」と仰せられてある、之を以て理論上の說明のみと思ふべからず、信念開發して安心を得るの時覺知自から發し正法目前に現はれ、三業長へに淸淨に歸するものである、故に參禪の客は先づ須らく大信心を發して大安心を得ることに努めねばならぬ。

（八）禪の處世觀

禪的修養の結果として大安心を得たならば此の大安心を根柢として世に處し大に利他的活動をせねばならぬ、吾等は進んで禪の處世觀を述べやう、何事に依らず臨機應變と云ふことが肝要じや、卽ち機會々々に臨んで、夫れに相應する手段を施すと云ふのが世渡りの祕訣、處世の上手と云ふもの、之れに反して「彼方は何と云ふ共、之が吾輩の主義である」などゝ力んで居ても駄目である。勿論かう云うても、無主義無節操たれと云ふのではない、如何に臨機應變と云ふても、自分の守るべき道、執るべき態度は、假令ドンナ艱難辛苦に逢ふとも曲ぐべきにあらず捨つべきではない、釋尊が四十九年、三百餘會の說法は、皆な是れ臨機應變の說、應病與藥の法であるが、さりとて釋尊の主義主張は、五千有餘卷の經卷中、何に於ても之を窺ふことが出來るのである。卽ち釋尊は時に據り、處に隨ふて色々な法門をお說になつたが、其中自ら終始一貫して居る處の活消息は歷然として明らかである。

此の一貫せる活消息を吾等の一身上に體得して世後りをするのが禪徒としての處世法である、處が臨機應變と云ふことが中々六づかしいので、充分確かな修養の功を積まねば出來ない、彼の明治雜新の際、士族等の多くが事業に失敗したのは此の爲である、今日でも尙ほ彼等の中には「苦はこれても……」と云ふことを鼻にかけて、一船の平民に對して「何の素町人が」とか「土百姓の僻に」とか云ふやうなことを云つて、徒らに武士は食はねど高揚子氣取りをして居るものがあるが、傍の見る目も氣の毒な程馬鹿げたことである、斯ふ者に者

にはどうしても禪の處世法たる臨機應變の妙藥を煎じて呑ませるより外には好い方法がない、併し此の妙藥も餘り呑み過ぎると、過ぎたるは及ばざるに如かずとか云うて、矢張り駄目ぢや。

是に於て居心應世と云ふが必要てある、居心とは心を据へつけることで、應世とは世に應ずると云ふこと、卽ち心をどつしりと据へつけて世の中の事々物々百般のことに處して行くのてある、世の中の人は稍もすると此の居心と云ふことを忘れて居る、イや多くは皆な左ふの樣ぢや、會々能く臨機應變の處置に出る人ぢやと思うて見ると、何時か脚跟下がお留守になり、主義や主張は外にして、疲くに最初の目的は忘れられて居る、又世間には隨分自分一代て財產をつくり上げた人もあるが左ふ云ふ人の中には何時まて立つても日庸根性が消せない、紳士紳商の仲間入りをせず、家には巨萬の富を有ちながら、何處となく賤しい人がある、之等も賞めたものてない、之れに就て一つ思ひ出した話がある。

知人某師が嘗て遠州の或る寺へ住持して居た頃、山田泰助と云ふ男があつて一代の中に多くの財產を働き出した人てあるが、自分は相當に財產が出來たから、貴人紳士と交際を結ばうと思うて、種々と其の手段方法を講じて居るが、其妻と云ふのが至つて吝嗇家て何かと云ふとヤレ費用がかゝる、物要がすると云うて、何うしても思ふやうに交際が出來ぬので困つて居た、乃て一日師の處へ來て、「私の妻は餘り吝嗇て困りものてすが、何うか何んとか一つ說得して頂きたい」と云はれたのて、師も「左うか」と承知したものゝ、之れは一つ閉口

した、マサカ他人の妻女と差向で「貴女は吝嗇で不可ない」と云ふ譯にも行かず、併し承知して居つて行かない譯にも行かぬので、兎に角泰助方へ出かけて行つた。

さて愈々彼の妻女に遇ふて、イキナリ拳を握つて妻女の前へニューッと突出し「若し此拳が始終斯ふなつて居たら何うてあらう」と問うと、妻女は「それは不具であります」と答へた、乃て氏も『成程之れは不具で、丁度摺子木の看板見たやうなもので、何の役にも立たゝぬ』と云ふ、次に五指を開いて示し、『それなら之れが始終斯ふてあつたら何うか』と云ふと、妻女は不思議相な顏つきて『それも矢張り不具であります』と答へたから、祢が『左様、之も矢張り不具ぢや、それだから此の五指握りづめて、轉んでもたゞは起きない、犬の糞か馬の糞でも握つて起る、又始終開き放しても不可ない……』と說き出すと主人の泰助は氏の說法の終らぬ中に横合から妻女に向つて「喃、これ菩提寺の和尙さんも彼樣仰しやるのだから、これからはマア之れ位にしてナア、」と五指を半ば開いて示し、それて一同大笑で話の濟んだことがあると、其の人から聞いた。

全く此通りて、握る時には徹頭徹尾握るが必要てあるが、それと同時にまた其通りに握つたのを放す事を忘れてはならぬ、之を禪門では把住放行と云ふ、把住とは捕へることて放行とはつき放すことてある、而して其の把住と放行とは、譬へば車の兩輪の如く、鳥の兩翼の如きもので、何れの一つが缺けても不可ぬ、然らば、如何にして把住放行、臨機應變の處世をなし得るかと云へば、

それは赤手空拳にして千變萬化する底の那人にして、始めて能く爲し得る處であつて、禪的修養なく安心の無い人では到ても覺束ないことぢや、今こゝて赤手と云ひ空拳と云ふも、野次馬のやうにから拳骨を振りまはせと云ふのぢやない。

赤手の赤の字は空無盡無物の義なりと云うて、赤裸々とか、赤洒々とか云うて餘物のないことであるから、勿論カラ拳骨には相違ないが、其實手の裡と云ふことではなくて、心の中に一物の固りを留めぬ事を云うたのである、お互に心の中に何か一物邪魔になるものがあるから、自由自在に千變萬化して、事に觸れ機に臨んで、種々に無量の方便を廻らすことが出來ぬのぢや、酒に醉ひ倒れてグウ〳〵寢て居る奴を覺ますには、德利に水を入れに耳元で振つて見せるが一番ぢや、如何に搖り動かしても起きない醉漢でも、耳元で德利を振つて見せると「ウム之れはまだ少々殘つて居るか、それでは醉覺めの水の代りにモウ一杯」と云ふので、直ぐに目を覺ますものである、之れは醉漢を覺ますに好適當の處であるから其功を奏したのであるが、醉漢の目を覺ますことが出來たからと云うて、其外の寢て居るものゝ枕元で水の瓶を拂つた所で功能のないは當り前の事であります。

禪門の師家が衆を接するの活作略は、皆此の臨機應變の手段であつて、而も師家其の人の心はと云ふと、空界無物で、心に一物をも留めて居らぬから、轉身自在翻身自由であることは、宛ら風車の廻る樣であるが、それはホンの一方で、他方より見る時は千鈞の弓も尙ほ且つ及ばずと云ふ程ドッシリとした處が

ある卽ち身や口さきが轉翻自在で風車の如きても、心はチャンと坐はつて居て恰も天上の月のやうに、風吹けども動ぜず、何處までも安住して居る、之を禪門の眞の作家と云ふのである、作家とは讀んで字の通りて、家を作すと云ふ事であるから、畢竟一家を柱へて行く處のものを云ふ、此の一家を柱へて行くのは中々仇や愚かで出來ることではない、雪竇が衆に示して「强に逢うては弱、柔に逢うては剛、兩硬相打てば必ず一傷あり」と云うてゐるのは實に作家として忘るべからざる金言である、獨り作家のみならず、苟しくも世に處するものは、此のドッシリとした所がなくては何にもなりませぬ。

彼の金鱗の話に於ける、三聖と雪峰との問答の終りに、三聖が今にも食いつかうと云ふやうな激しい勢で

『千五百人の善知識話頭だも未だ知らず、――門下に一千五百人程もある處の大善聖知識であるから定めて威いお方と思うて居たが、何の事だい逢うて見れば話が一つ滿足に出來ぬとは情ない』

と半ば雪峯を輕蔑して云ふと、流石は雪峯、そんなことて頭をかいて引込みはせぬ、さりとて此方も飛びかゝつて彼を突倒さうともせぬ、「老僧住持事繁し」とスルリ下手に拔けて、三聖に空を突かせ、敗けて勝つの手段に出た處は、實に雪峰の作家たる所以此所にあるのてあります。

曾つて洪川和尙の所へ或る雲水が來て「久しくコウセンと響く、麥コウセンか米コウセンか」と問ふと、洪川和尙は「何方てあるか嘗めて見よ」と云うた乃て僧は何を此の和尙……と云ふ權幕てカーッと大喝一聲した、時に洪川和

尙其んなことで面食つて引込むやうなものぢやない、忽ち其僧の背を撫でゝ「オー咽せたか〳〵」と云うたと云ふことであるが今尙ほ口碑に殘つて居るが、洪川和尙も亦作家の漢と云ふべきである。

要するに人々お互に世の中に處して行くには、此の禪門の作家が用ゆる處の活作略をめぐらして行つたならば、天下はいつも泰平、家內は何時も平和無事と云ふものぢや、之れが所謂世渡上手て禪的處世法の妙を得たもの、臨機應變の妙を得たものと云ふべきてある、禪の處世觀は此位にしておく、禪に志し禪を修するものは殊に此點に注意せねばなりませぬ。

（九）悟道の問題

禪に於ける衆多の問題を諸方面から說き終つたから是には禪の所謂悟道の問題を觀察して見やうと思ふ、凡そ悟道と云ふものは自ら無位の眞人となりて社會國家の爲に活動することにあらうと思ふ、元來無位の眞人と謂ふことは能く禪て云ふことてあるが、これは有とか無とか云ふことに對して起つた語で、皆樣が「有り」と取り定めて居る事も確に有るか恁麼かは當にはならぬ。

迷故三界城、悟故十方空て、迷へばこそ此の三界と云ふ者もあらはれ、悟つて見れば三界に用事はない。此を權兵衞太郎兵衞と云ふ、我はキット此に居ると自分に取りきめて見た處で、悟道の上から見れば、確かに間違がないか恁麼かは頗る疑問である、元來此の生れると云ふことが抑も大間違の始めて、生れた時には、目出度い一方て、殆んど死といふことをば打忘れて居るが、畢竟生

れさへせねば、死と云ふことはない、生死は二にして不二である、死ぬる爲に生れたのぢやとして見ると、生れる位不吉のことはありませぬ。

サアかうなると寧ろ生れた時が不吉で、死んだ時が目出度いのではあるまいか、なぜと云ふに生れると直に、死ぬ方に近くなる道理、然れば生れる方に近くなるの死は、餘程目出度くなければならぬ筈ぢや、ソコデ先づ無位の眞人てふ一語を知悉して悟道を得るには、大死一番生死の迷ひを解脱せねばならぬ、併し夫れは實に六ヶ敷ことである、何とならば釋尊御在世の時てすら、此敎外別傳の玄旨を悟られたのは、迦葉和尙御一人ぢやとある、之を「世尊拈華迦葉微笑」と申して禪の根本であります。

此敎外別傳と云ふは、經文や說法を聞た位で分る次第のものてはない、卽ち水は冷い火は熱ついと云うても、話ばかりて意味はわからぬ、冷暖は自知するの外はない、其れを以心傳心と申すのてあるから、禪を佛心宗とも申してある之れが卽ち千聖不傳の妙の譯柄てある、自分の心に成程こゝぢやと發明の出來た時、自分の心と、佛陀の志と互に相合體して、寸分かわりのないのを機法一體というて、最も此時は佛と衆生と差別は御座いませぬ。

併し斯樣に六ヶ敷ばかり申しては、禪は愚夫愚婦の濟度は出來ぬ、故に釋尊の說法にも頓漸の二法ある如く禪宗に於ても、昔の列祖方は見性成佛を以て正行となし、看經禮拜を以て助行を致された。百丈禪師は「若し此事を了せずして輪廻の苦を出るは看經禮拜も又かなり」と申されてある、法に差別はなけれども、人に智愚の差があれば、何うしても、隨類應機の外は御座いませぬ

成程經文の上では聖道門とか淨土門とか又は自力とか他力とかソレ〳〵門派が立てあるが、禪宗は無門を以て法門とするとある、何處から入らねばならぬと云ふ門戸は更にない、古人は佛の相好を拜して悟つた人もあれば看經禮拜で悟つた人もあり、花を見て悟り、電の音を聞いて悟つたこともある、何から入て工夫せねば悟れぬと云ふキマリはない、六祖大師は米を搗て居て大悟徹底せられた如く、決して坐禪觀法の儀則に依らねば悟れぬとか又學問がなければ悟りが開けぬのと云ふことてはないのです。

山岡鐵舟居士が最初星定老師を問はれた時の問答に、鐵舟問うて云ふ「佛門に入らんには那邊より手を下すべきか」星定老師答云く「此の如く問ふものは是れ何物ぞ、之れを知るを第一着の急務とす」サアこゝが大切の場所である。

商人ならば二一天作の五と算盤をはじきながら、今此算盤かゝへて算用するものは是れ何物ぞ、醫師ならば病者の脈を取りて其善し惡しを見分けるものは是れ何物ぞ、念々この正念を相續すれば那時か主人公に面會することが出來るのであります。

初祖達磨大師は面壁少林寺に四來の禅僧を接化せられ晩年に至り、二祖の惠可と云ふ僧が參られて大に問答がはじまつた、其時の問答に惠可が、大師に向つて問はるゝには「乞ふ師我爲に安心し給へ」ドウゾ私へ安心の旨を御示し下されたいと願はれた、ソコデ達磨大師の答に「其安心するべき心を持ち來れ、汝が爲に敎を授けん」先づ其方の安心々々と云ふ其の安心すべき心と云ふものは何處にある、其心を此處へ持て來られよ、直ちに安心の旨を與へてやらうぞ

と仰られた、恰も鐵舟居士と星定老師との問答も其趣は同一です。

由來禪宗の法門は別に經典を須ず、向ふの出樣次第で敎化する、之を頓機妙法と申します、若し皆樣の中に禪旨が聽き度いと申す方があらば、其聽き度いと云ふ心を玆へ出して見られよ、達磨大師に代つて說得しませう、然し其心といふものが、中々つかまへられるものでない、もしつかまへるものがあつたら安心どころか、不安心千萬である。永明禪師は「心に眞相なきは安心なり」と申されたが、兎角凡夫は此心と云ふものを一ッ拵るゆゑ、生れて來るの死んで往くのと、色々のことを云うてさわぎ出す、乃て先づ其心と云ふものを一ッ捨ててしまはぬと無位の眞人てふ境界が開かれませぬ。

昔五祖大師の門人に神秀と云ふ御方があつて「身是菩提樹、心卽明臺鏡、時々勤拂拭、莫レ令レ引ニ塵埃一」と云ふ偈を作られたが、此偈は御互の心の鏡と云ふものは、本來聊も曇りのない淸淨なること佛の心と寸分相違はないが、折折煩惱の雲霧がかゝる故にそれを時々拂へば後には佛になれると云ふ意味である、成程その通りに相違はない、然るに是れは聖道門で中々月日がかゝる、ソコデ六祖大師は右の偈を和韻して「菩提本非レ樹。明鏡亦非レ臺。本來無一物。何處惹ニ塵埃一」是れが越超直入如來地と云うて禪宗の眞面目であります。先づ第一着に其心の鏡と云ふを一つ打破すると煩惱の雲霧もかゝる處がない、サアこゝが見性成佛の本體である、サテ斯樣に申すと「ハハア禪の悟りは何も乎も無くして仕舞ひ只々空々寂々と云ふ境界になるのか」と、直ちに空々寂々と云ふ分別の雲霧を起す、其空々寂々も亦打破して無位の眞人と會見するの場に

到らねばならないのです。

私共が若し此境界に到らんと思へば茲て大死一回せねば、禪の妙諦は味へませぬぞ、併し死ぬると云うても別に此の體を冷却うするでもなく又葬式するのでもない、卽ち今持合の其心を一つ振り捨てるのである、今互に學者は學者愚人は愚人それ相應に色々の垢を付けて居る心である、語をかへて之を云へばソレガ迷の種であります、兎角凡夫は、死ぬる〳〵と思うて心配するが、先づ此の佛門に入りたる上は、此の生死といふことを第一着に放下せねばならぬ、例せば軍人として一朝戰場に臨み死を懼れる樣ては、功名が顯はれず又國家の爲に忠義を盡すと云ふことも出來ぬ、それゆゑ先づ生死は無いものと心得ねばなりませぬ。

皆樣篤と考へて御覽、お互に生れる時に自分から生れやうと思うて生れて來たのてはない、然れば悟道の上より云はば死んて往くと云ふ代物はもとよりあるべき筈はない、生れる死ぬると云ふはお互に跡から付けた分別の垢てある。されば動靜不二、生死一如てなければならぬ、故に經にも「衆生生死を出てゝ涅槃に入る、生死涅槃を分別するが爲なり」とあつて、御互に此の分別と云ふことさへなければ、生死に預るものてない、ソコデ佛は色卽是空と御說なされ又「此諸法は定相にして不生不滅不增不減」とある、卽ち三世常住てある、畢竟有相無相本來平等の悟道の境界に到らねば生死を脫得することは出來ませぬかくて佛を離れ祖を離れて天上天下唯我獨尊の大境界に體達し得ば是れ實に禪の悟道てはありますまいか。

（一〇）結論

禪學に關する理論の方面は色々と述べ終つたから是には斷片的に禪徒の心得とも成るべき話柄を列擧して參考に供しやうと思ふ。「無門關」に「參須實參、悟須實悟」と云ふ句がある、若し參禪するならば本當に參禪せよ、悟るならば立派に悟れと云ふのぢやが全くその通りぢや。一年や二年やつて見てなかなか行けさうにないものぢやから直ぐに氣が變る、他に轉ずる、斯ういふ薄志弱行にして根氣の乏しいものは、何事にかゝつても成就は出來ないのである。

茲に大努力を以て參禪をした美談がある。彼の香嚴和尚といふは潙山和尚の法を繼いで、禪門で名聲赫々たる大和尚ぢやが、此和尚が潙山の許にあつて刻苦修行すること十八年、その間と云ふものは視れども見へず、聽けども聽こへず、食へども其味を知らず底の放身捨命、正念三昧の大刻苦をやつたのぢや。けれども何の得る所はない、何としても分らぬ。十八年といふ長い年月の間二六時中坐禪ばかりやつて居りました、今時の若い者が一年や二年奉公して居つて給料を上げて貰へぬと云うて直ぐに不平を起し奉公口を變へるか、方針を替へるなど根氣のない者には、夢にも斯ういふ大忍耐は出來はしない、所が今の香嚴和尚も時節因緣といふものは止むを得ぬもので十八年間一生懸命で修養した、けれども悟りの緒も得られない、とう〳〵一先づ潙山の許を辭して庵居した、香嚴和尚に取つては其時は如何ばかり殘念なことであつたらう、此の實驗のない者には分らぬが實は死ぬよりつらいさうだ。

併し「思ふ念力岩をも通す」て、此の香嚴和尚が庵居して或日の事、庭の掃除をやつた、所が小石が箒の先にかゝつて竹藪に飛んて、カラカラというた。其音を聞いて香嚴和尚は豁然と大悟したのぢや、サア其の嬉しさ喜しさと云ふものは、何とも斯ともいひやうがない。「吾れ十八年間參禪工夫に餘年なかりしが、實に師が其間毫も吾れに敎へざりし鉗鎚の嶮峻を謝す」というて居る。十八年間不屈不撓で練磨工夫の功を積んて居ればこそ、偶然擊竹の聲が緣となつて其骨折りが現れたのぢや、自分で血を吐き腸を斷つやうな苦境を嘗めて鍛ひ上げたのでなくては師より敎へられても、活潑潑地の働が出來ぬ。此味が始めて分つて師の嶮峻を謝すと絶叫したのです。

無關門の一則に「南泉斬レ猫」といふがある、中々の難透ぢやから容易には分らない、ある日東の禪堂と西の禪堂と、兩方の雲水共が一疋の猫兒を捉へて、「彼方の猫ぢや」「此方の猫ぢや」と、喧々囂々爭うて居る。其處へ山主の南泉和尚がズーと出て來た。此有樣を見て猫兒をグッと掴み、右手に明晃々たる一刀を拔き放ち提起して曰く「大衆道得卽救、道不レ得卽斬却也」猫兒を大衆の面前に突き附けて斯ふ云うたのぢや、道へば猫は助けやうが道はねば猫は殺さる、仲々鋭い所問ぢや、冷汗の出る所ぢや、昔の師家は斯かる手段を以て禪徒を策勵したのであります。

所が「衆無對」で馬鹿坊主等の事ぢやから、和尚に嚴しい太刀を直向より浴せかけられて、啞んぼか聾かのやうに、ウンともスンとも道ひ得ませんでした。實に殘念な事ぢや何とか云ひやうもありさうなものぢやに、燒物の南瓜が轉が

つて居るやうに、澤山の坊主頭はゴロ〳〵して居るが一句も出ぬ。そこで南泉「遂斬レ之」とう〳〵小猫を斬つて仕舞つた、小氣味のよい事をやつた、偖て南泉とて小猫を斬るのが能ぢやない、大衆を誘ふ大慈悲心より大いに仔細のある事をせられたのです。

佛眼と云ふ和尚がこの南泉の仕打を頌して「國を安んじ家を安んずるは兵に非ず、魯蓮が一節又多情、三千の劒客今何にかある、獨許す將軍の太平を致すことを」というて居る。こゝの極意は言葉や筆の先で說いても何にもならぬ。天下の禪徒は大に味つて見ねばなりませぬ。

白隱和尚在世の當事、峨山と云ふ豪傑があつた、當時すでに三十五人の善智識を破つて天下無敵なりと思うた。しかしまだ白隱に會はぬから一日機を得て入室したのぢや、白隱大いに罵つて曰く「何處の惡知識からそんな悟りを覺へて、そんな醜態を演ずるぞ」と打つて打つて打のめした。峨山屈せず、白隱愈々出でゝ愈々酷なり、とうとう峨山も我を折つて開示を乞ひました。

白隱こゝに於て「隻手の聲を聞いて來い」と、何と云つても許さぬ。峨山刻苦怠らず四年を經た、白隱其時年八十。室內の嶮峻なる一斑を知り得るてはないか、もはや法の爲めには私はない、名譽心も何もない、十年の後とう〳〵隻手を打貫いた、後年峨山が化を布くに方つて曰く「我白隱の道を尊ばず、只十年間我を引付けて說破せざりしを尊ぶ」と、容易の看をなせぬ處ぢや、今の禪徒は一年も叢林に居ると、直に隻手を透つたといふ、片腹痛き事と言ふべきてはありますまいか。

何事も勇猛精進にやらねばならぬ、純一無雜を精といひ、勤行不退を進といふ、如何なる誘惑にも、恐れず屈せず惑はされずに、一心不亂、正念三昧命懸けで進んで行くのがそれぢや。世間のことてさへ成功者と云はるゝ者は皆命懸てやつて居る、況んや大法の事は、人間修養上の難中の難ぢや、浮か〳〵した料簡で何うしませう。釋尊の弟子の周利盤特は箒を覺へると掃くことを忘れ、掃けと云はるゝと箒を忘れると云ふ位の男であつたが、一心に修行して羅漢の位迄上つた。馬鹿でも愚者でも構はぬ、千里を走る馬よりも遲々と歩む牛が却つて勝のぢや。正直に辛抱が大事であらうと存じます。斯くしてこそ眞に「久遠の光」に接し得るでせう。(畢)

大正十一年五月十日印刷
大正十一年五月十三日發行

三九洞藏版

大正禪話奥附

定價　金壹圓八拾錢

著作者　南澤月友
發行者　東京市麻布區宮村町六三　村上道隆
印刷者　東京市麻布區宮下町一四　中島嘉一郎
印刷所　東京市麻布區宮下町一四　國民精神印刷課

發行所　東京市麻布區宮村町
振替東京三三五二四　國民精神出版課

渡邊小洋氏著書目錄●國民精神社發賣

我等の進路

○定價金貳圓　▲送料金拾貳錢

立志健鬪 修養禪

○定價壹圓貳拾錢　▲送料金拾錢

暴風に面する日本

○定價金壹圓五拾錢　▲送料金拾錢

殺活自在 處世禪

○定價壹圓貳拾錢　▲送料金拾錢

身心鍛錬 健康禪

○定價壹圓貳拾錢　▲送料金拾錢

迷信の眞相を暴露す

○定價金壹圓拾錢　▲送料金八錢

古今名僧 手紙禪

○定價壹圓貳拾錢　▲送料金拾錢

解脫の妙味

○定價金八拾五錢　▲送料金八錢

家禪家で云へば何かと云へば隨分無圖な面倒しい理窟をならべ、本も澤山あり○世間に澤山ある。禪に關する。○禪學の道俗的一般者

▲曹洞宗布教主筆師　國民精神主筆師　渡邊小洋先生著

自殺活在 處世禪

立志健鬪 修養禪

もと　書　兩　記　上壹
錢拾貳圓壹金　冊　壹
錢　拾　金　料　送

發兌
東京市麻布區宮村町三五三四
國民精神社

しては解何本來の面目を提唱し、世上の人は右に長所一貫し、極平易に引例して禪學能易くして見るも適しての本教ゆ一書は、こけおどかし説や面倒な解釋をならべ、俗平山あ○世門佳、殊に禪宗の面目と同時に、はは全く名前を付けに集めて書物の書さる敢えて特に布教師の出來事を面白く見れば趣味せられ例

◎布教師 渡邊小洋先生著

暴風に面せる日本

○四六版新式の美裝箱入良書
○定價壹圓五拾錢（送料拾錢）

（大好評）

現代式講演資料

現代の布教傳導は是非とも現代の問題に觸れねばならぬ。現代の問題は必ず國家と密關してゐるので、此點から總べての講演は活氣づいて來る。乃ち「暴風に面せる日本」は此の立場に於ける唯一最高の講演資料である。故に其の內容としては

第一章 改造問題
第二章 勞働問題
第三章 農村問題
第四章 生活問題
第五章 敎育問題
第六章 婦人問題
第七章 思想問題
第八章 文化問題
第九章 國力問題
第十章 日本人の使命

の十段に分ち夫れ〳〵高級なる社會觀、國家觀の上に立ちて、論及せる處、其まゝ取つて一大演說と見るべく、眞に得難きの良書なれば布敎師、說敎師、辯士、講師等必ず一本を座右に供へて參考とすべく、眞に生きたる材料書と云ふべきである

發行所 東京市麻布區宮村町 振替東京三三五二四 國民精神社

◎國民精神主筆 渡邊小洋先生著

迷信の眞相を暴露す

○三六版美本○三百有餘頁
○定價壹圓拾錢（送料八錢）

（略內容表）

現代民間に行はれつゝある迷信は果して價値あるものなりや、或は有害無益のものなりや、此れ實に大問題なり。著者常に此方面に心血を注ぎ、其の研究の一端を發表せる者本書なり。下卷としては有名なるマルチンルーテルの宗敎改革を評傳し、以て現代宗敎家の指針を暗示せり

○現代迷信の分類
○十干十二支研究
○禁厭の價値如何
○發音言辭と緣起
○祈禱の功德輕重
○運命ト占の正否
○日時善惡の眞相
○方位吉凶の問題
○易は當るもの乎
○健全なる眞信仰
○ルーテルの宗敎改革と羅馬法王の赦罪劵

發行所 東京市麻布區宮村町 振替東京三三五二四 國民精神社

繁簡中を得し理想的經典

曹洞宗大學前教頭
大本山永平寺前後堂
横尾賢宗老師著

般若心經講話

大好評!! 第四版發行

○四六版 頗美裝

○定價 八拾五錢 (送料六錢)

謂ふ勿れ「般若心經は佛教の空思想を説破せる物なり」と、豈に只に「空思想」のみならんや、八萬四千の法門、五千四百の經卷、佛陀五十年の大説法は悉く收まりて「般若心經」中に容在せり矣。

此經一回の讀誦は一切藏經の讀誦に如き、此經一卷の體認は寔に一代佛教の體認たり。僅に二百六十二字の「般若心經」一卷、是れ實に天地宇宙なり、自已なり、「心經」を知らずして世界を知るべからず、自已を知るべからず、天地宇宙を知るべからず、佛教の佛の字も知ること能はざる也。今横尾教頭、深遠の學識と幽玄の知見とを以て此の「般若心經」を講述せらる、此書は實に佛教の手引草にして又佛教究竟の哲理なり。迷へる人、狂へる人、苦める人、惱める人、泣く人、笑ふ人、人生問題に心を寄する人、共に來て「般若心經」の妙趣を叩け、心氣直に恍惚として羽化登仙するの思あらん、敢えて現代日本國民に推奨す。眞に是れ佛教經典中の權威!!

發行所 東京市麻布區宮村町 振替東京三三五二四 國民精神社

◉通俗平易に一切の學術を説破す◉

思想界に唯一の權威ある月刊雜誌を看よ!!

國民精神

(毎月一回) 主筆渡邊小洋 (一冊發行)

◀教育界並に宗教界の名士悉く執筆▶

藤岡博士 椎尾博士 遠藤博士 南澤亨安 中根環堂 吉川太梵 伊藤道海 二木博士 末廣學長 鈴木博士 井上子爵 南條博士 村上博士 前田博士 田雷斧

堀内中將 島田三郎 新井石禪 秋野孝道 佐伯博士 渡邊洞水 建部博士 澤柳博士 芳賀博士 井上博士 山崎博士 福來博士 望月學長 山田博士 姉崎博士 桑原楓山 田中弘之 加藤咄堂

三上博士 長瀨鳳輔 高楠博士 渡邊洞水 建部博士 澤柳博士 島地大等 長谷川關藏 澁澤子爵 岡田良平 富士川博士 吉野博士 平沼博士 永井柳太郎 上杉博士

教育宗教政治實業に對する高等批判雜誌!!

發行所 東京市麻布區宮村町 振替東京三三五二四 國民精神社

エト 6R-55

全卷悉く是れ布教の材料

◉桑原楓山先生著

○袖珍三百廿余頁頗る美麗表裝
○定價金壹圓參拾錢（送料拾錢）

開運秘訣 此處に一策あり

○無資開業の時
○商賣失敗の時
○家資分散の時
○借金し度き時
○米價暴落の時
○株式失敗の時
○惚れられた時
○信仰を得る時

○學資途絶の時
○就職口求の時
○禁酒禁烟の時
○自殺する時
○病臥呻吟の時
○徴兵檢査の時
○結婚離婚の時
○夫婦喧嘩の時

○訴訟提起の時
○大賣出しの時
○同盟罷業の時
○秘密病せる時
○借家立退の時
○說教をする時
○著書出版の時
○遺言作製の時

○演說練習の時
○文章作製の時
○字練習の時
○詩歌俳句の時
○演壇に立つ時
○米を賣度き時
○醫者を擇ぶ時
○其の他數十項

吾人の目にふれ耳にする一切の事象は一として布教の材料とならぬは無い。本書は此の見地に立ちて、世上の汎在事件に就て悉く一通りの解決を與へたれば列擧せる各項が皆一種の「五分間演說」であつて、又一項づゝが皆各人の常識內容となるが故に本書は「座談の秘訣書」と稱するも不可は無い。即ち本書は趣味の書たると同時に又「布教材料書」「五分間演說集」であるから最も參考となる良書です

發行所 東京市麻布區宮村町 振替東京三三五二四 國民精神社

終